市浦村十三湖

中島遺跡発掘調査報告書

1986

青森県市浦村教育委員会

市浦村教育委員会

教育長 柏 谷 秀 一

十三湖中島遺跡は、昭和59年に第一次発掘調査を実施し、遺物と遺構を検出しました。

今回は第二次発掘調査であるが、主として当中の島のC地区・中央区を対象として発掘調査を行ったのであるが、柱穴群が検出され、当中島地区には、中世および古代において建造物が所在したことが明らかになりました。

云うまでもなく、当市浦村には、安東一族の遺跡が数多くあります。

当村では「過疎地域活性化プロジェクト事業」の一還として「十三湖・中の島公園施設整備事業」を実施しており、「安東文化の古里づくり」をすすめております。 すなわち史跡型観光地の整備中であります。

これらの当村における重点事業をすすめるにあたって、その事前調査としての発掘調査でありますが、発掘の結果については、後述するとおりでありますが、当中島遺跡には、既述したとおり遺構群が所在することが明らかになりました。

当村では、この遺跡を保存しながら、史跡型観光地の造成に努力をつづけております。

調査に当られた各位に感謝申上げるとともに、史跡の保護に万全を期す次第であります。

1. 本報告書は、青森県北津軽郡市浦村教育委員会が、昭和60年度に実施した「十 三・中島遺跡」第二次発掘調査の記録である。

遺跡は、青森県北津軽郡市浦村大字十三字土佐1-80・81番地に所在する。なお第二次調査は、昭和60年4月1~6日、および、8月5日~16日の2回、すなわち、春・夏に分けて、B地区~C地区、中央区で実施された。(第2図参照)

- 2. 本遺跡は、昭和28年度に早稲田大学桜井清彦氏が豊島勝蔵氏とともに調査され、 桜井清彦氏が設定された「東北北部の土師器型式→第一型式」の基礎資料の一部 となった土師器が出土した重要遺跡である。
- 3. 本遺跡の発掘調査において「地学」に関する事項は、川村真一が担当総括した。 またセクション原図は後掲した各調査員が担当した。
- 4. 発掘にかかわる記録は、山川夏子・佐藤美香が担当、図面のトレースは菊池由 紀子が担当した。またレベルの移動等、測量は市浦村役場建設課員が担当、設営 ・資材等は、教育委員会職員が担当した。
- 5.他の一切は新谷雄蔵が担当執筆したが、青森県教育庁文化課員の助言・御指導 を賜わった。ここに記して謝意を表する次第である。
- 6. 出土遺物はなかったが、柱穴状ピットの遺構が検出された。このことから中島に、遺構が存在することが確認でき、その性格、規模等は今後の研究に期待される。

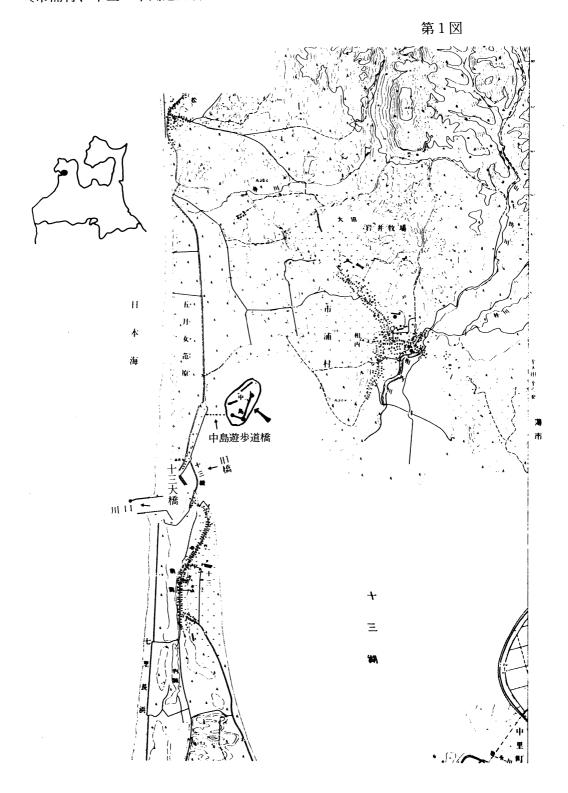
目 次

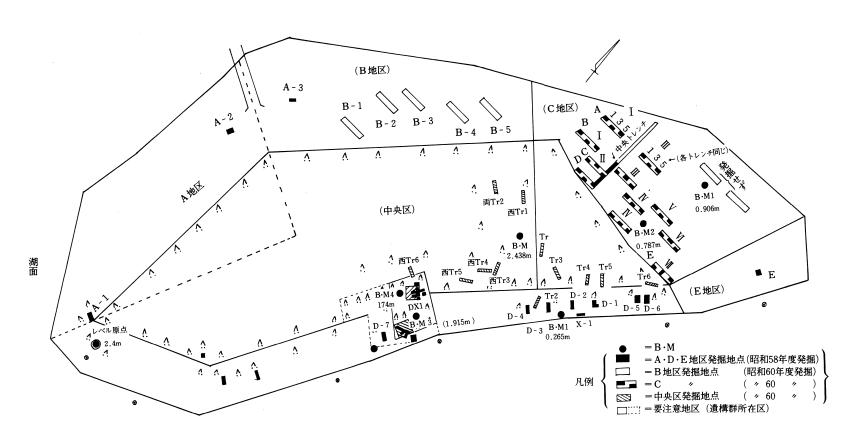
○序 文

○例 言

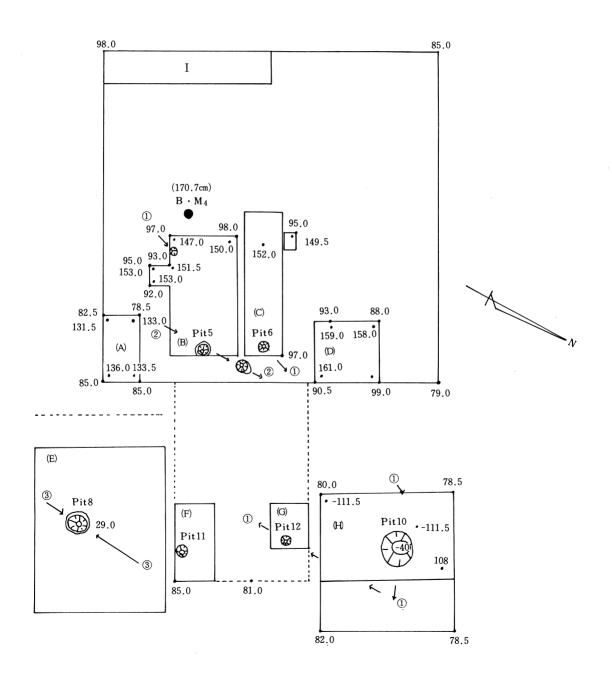
				_			
図 版	・ 実 	測 図	等	頁	写真(スナ	ップ・グリット、遺跡)	頁
第1図 十三	・中島遺	跡付近地	形図	1	P.L1~3	• 発掘メンバーとスナッ	19
第2図 十三	・中島遺	跡トレン・	チ配置	2		プB・C地区全景	21
図					P.4 ~16	・トレンチのようす	22
第3図 DX	1地区グ	リット配	置図	3	1	トレンチのようす、そ	34
第4図 С地	区トレン	チ配置図		4		Ø 1 ~ 4	35 38
第5図 D地	区基本層	序図(D)	X 1を	5	P.L21	•Tr2 の層序	39
含む)				l	・トレンチのようす	40
第6図 С地	区基本層	序図		6		その 5	
第7図-1					P.L23~24	• 柱穴状ピットと発掘ス	41
中央	区基本層	序図		7		ナップ	42
第7図-2.	3				P.L25~28	• 柱穴状ピットのようす	43
Tr	·Tr 3	セクショニ	ン図	8			46
第8図 西tı	5 南壁	セクショニ	ン図	9			
第9図 DX	1地区	В • С • І	H · G	10			
		横断図		10			
"	"	C・B横脚	折図	10			
"	"	E横断図		10			
第10図 D-	11発掘区	平面図		11			
第11図 C地	区各トレ	ンチ、セク	クショ	12			
ン図	その1	~その6		17			
第12図 十三	・中島遺跡	跡、出土の	の土師	18			
器、	察文土器						

(I)	発掘要項と調査参加者・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 47
[∐]	発掘日誌抄	•51
(Ⅲ)	地形と地学的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 55
(I V)	出土遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 59
(V)	考 察	61
*	参考文献	



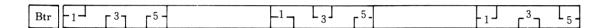


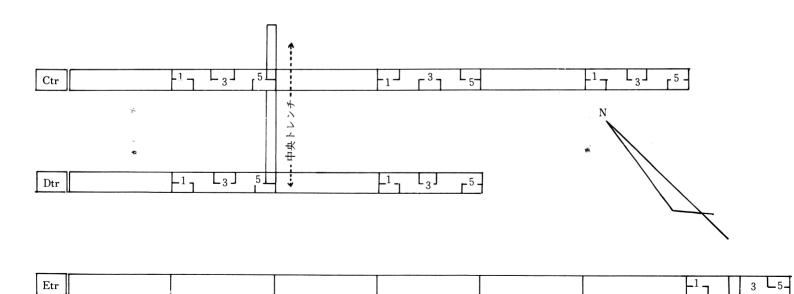
 $[DX_1$ 地区グリット配置図] $S = \frac{1}{100}$

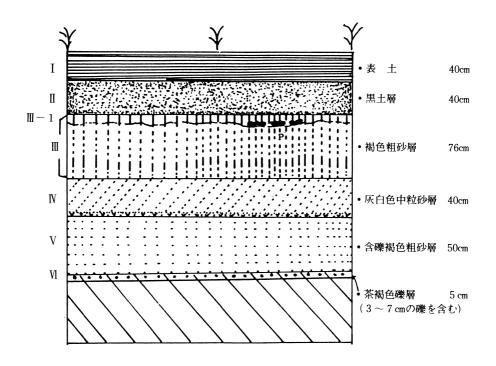


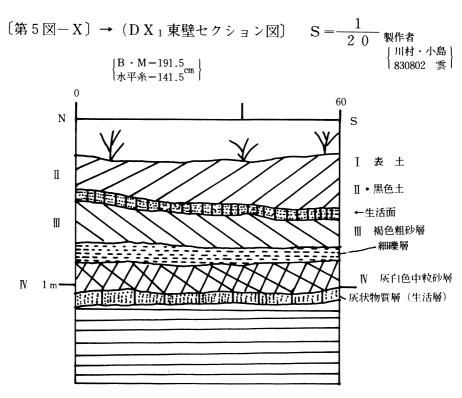
州区トレンチ配署図	(本本図)〕	S	1
地区トレンチ配置図	(坐平凶/)	5 —	4 0 0

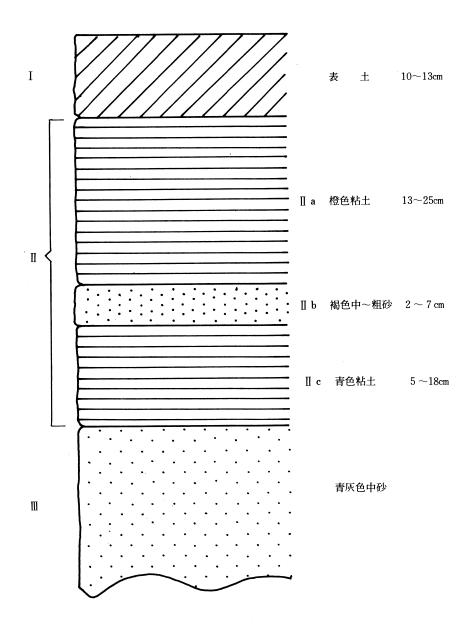
FL)#	I	П	Ш	IV	V	VI	VII
Atr -1-	[3] L ₅ -		- ₁				

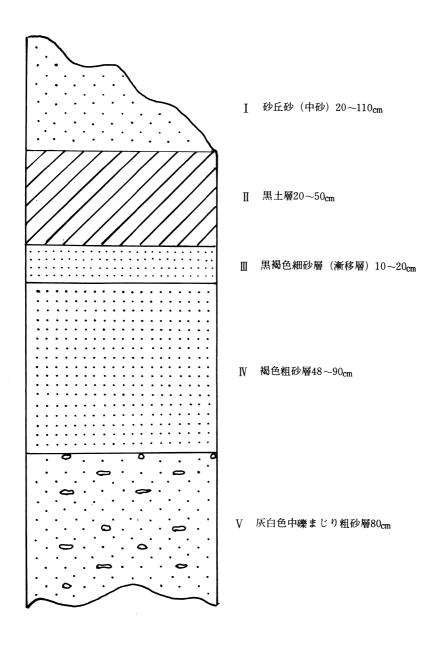






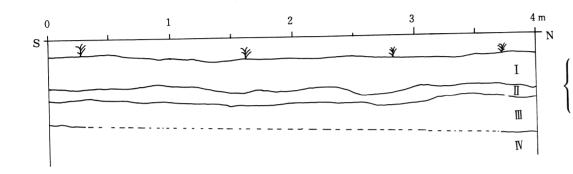




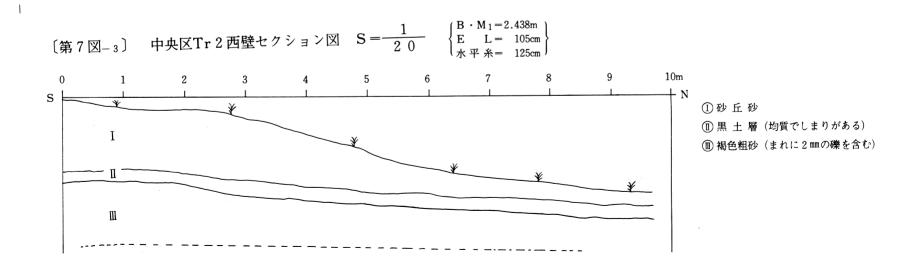


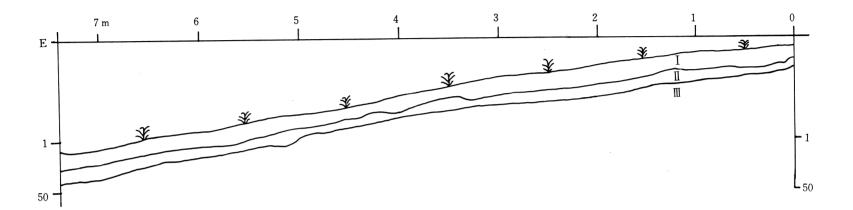
「中央区Tr 3 東壁セクション図」
$$S = \frac{1}{10}$$

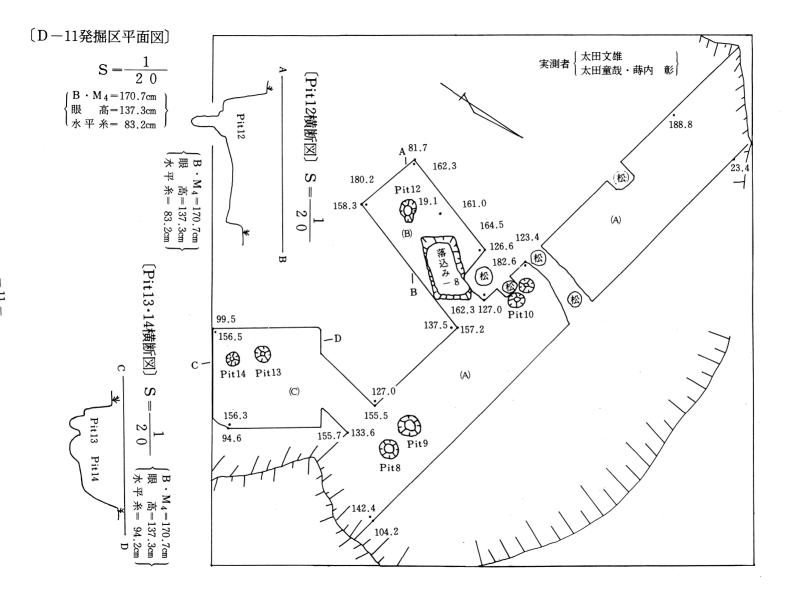
$$\begin{cases} B \cdot M_1 = 2.438m \\ E \quad L = 83.5cm \\ \text{水 平 } \text{糸} = 112.0cm \end{cases}$$



- ① 砂質 黒 土 層→均質で中に長石〜石英の微粒 子を含む
- ① 黒褐色細砂層→漸移層で細砂の中に、まれに○ 3mmぐらいの礫を含む
- ® 灰白色中礫まじり粗砂層→細~中礫層で7~ 7mmの安山岩・流紋岩・玄武 岩・頁岩礫を含む

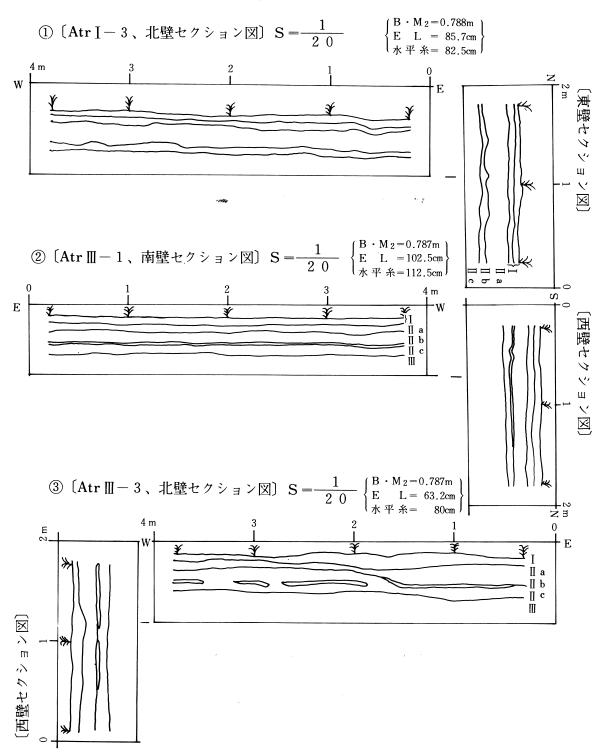




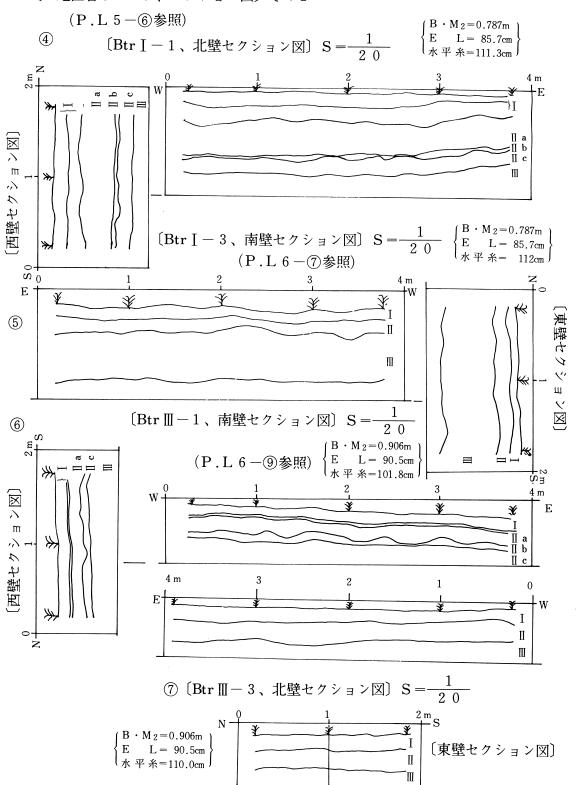


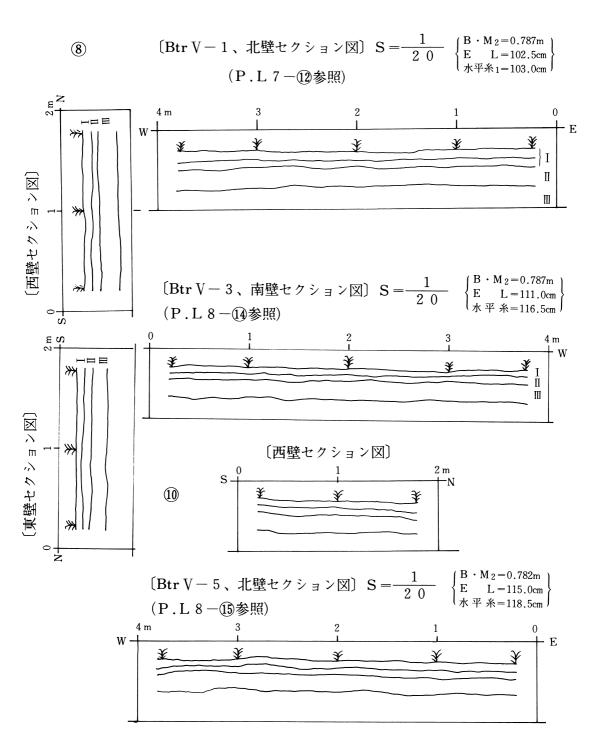
[C地区各トレンチ、セクション図] その1

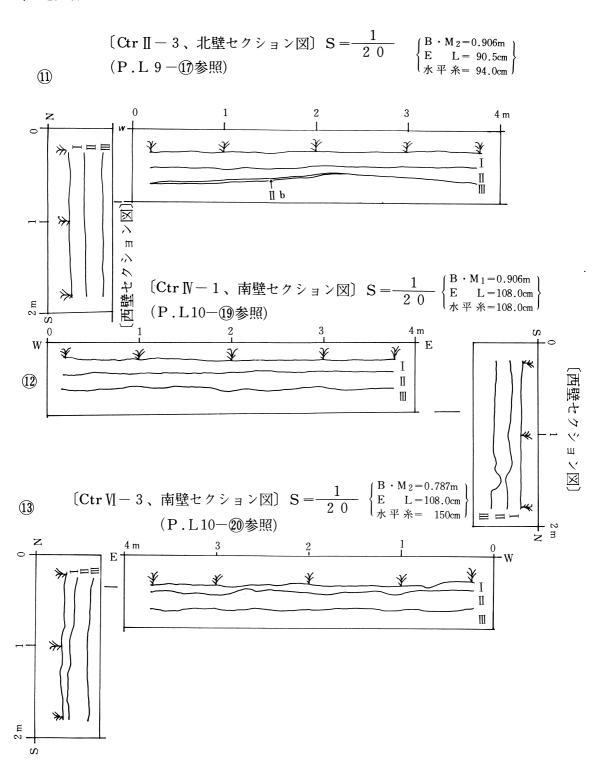
第11図-1

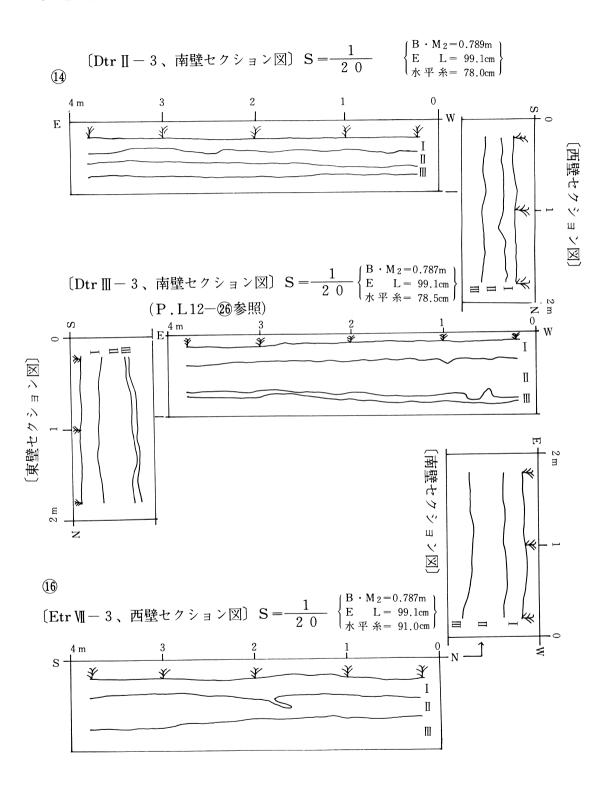


[C地区各トレンチ、セクション図] その2





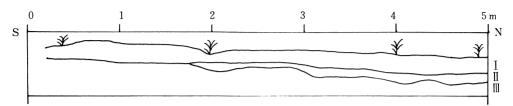




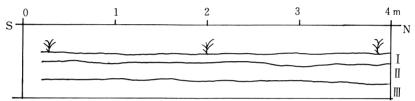
第11図-6

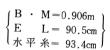
[C地区各トレンチ、セクション図] その6

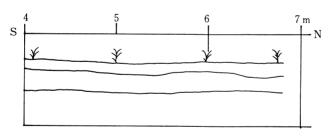
〔中央tr南、北壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ その 1 $\widehat{(17)}$ (P.L14-31)32参照)



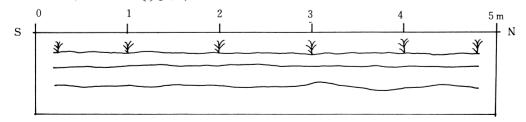
①8 「中央tr南、北壁セクション図〕 $S = \frac{1}{20}$ その 2 $\begin{cases} B \cdot M_1 = 0.906m \\ E \quad L = 90.5cm \\ \text{水 平 } \text{糸} = 93.4cm \end{cases}$



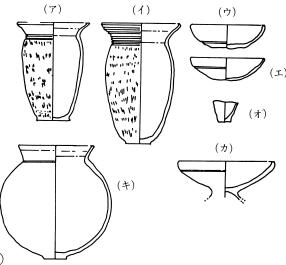




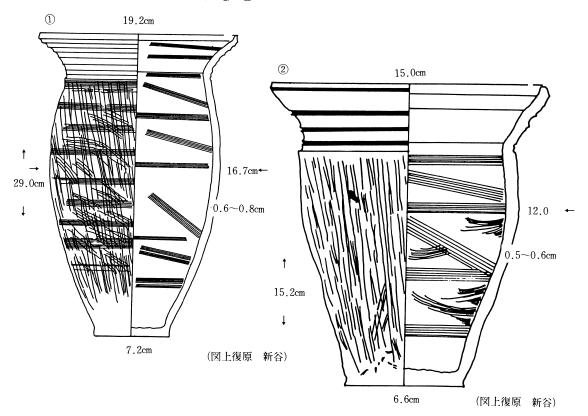
②D〔中央tr北、西壁セクション図〕 S =-(P.L14-33参照)



○考古学雑誌40巻1号より模写(ア~キ) はセットである。



⊙D-10区出土 (擦文土器) ① ②



〔発掘メンバーとスナップ〕



☆4月の発掘隊メンバー

☆8月の発掘隊メンバー





☆C地区発掘スナップ

(○東方より)

☆発掘後のB地区



(○東方より)



☆発掘後のB地区

(○東方より)

☆発掘直前のC地区のよ うす



(○南東より)



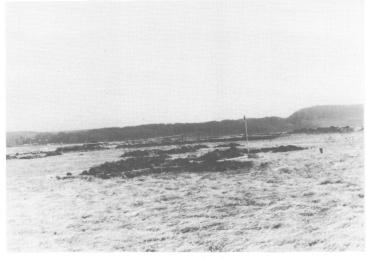
☆A・Bトレンチ遠望

(○東南より)

☆A・Bトレンチ北部付近の遠望



(○東南より)



☆Cトレンチ付近のよう す

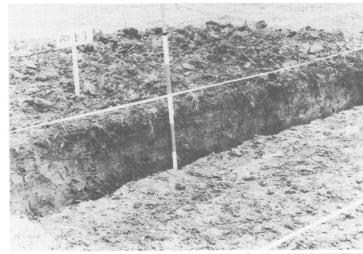
(○南東より)

(西壁)

☆AトレンチI区2のよ うす



2

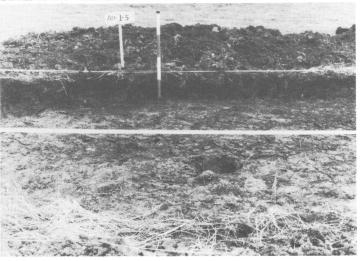


3

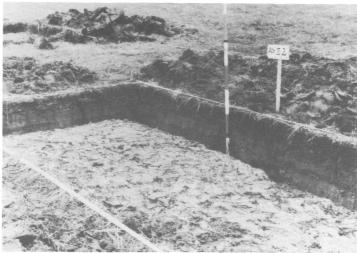
☆AトレンチI区3のよ うす (東壁)

(※ 以後Atr I・3のように略記する。)

☆Atr I・5のようす (西壁)



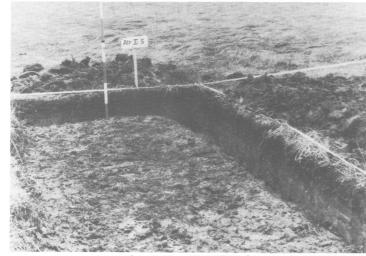
☆Atr Ⅲ・2のようす (東壁・北壁)



(○南西より)

(4)

(5)



☆Atr III・5のようす(東壁・北壁)

(○東南より)

☆Btr I・1 のようす (西壁・南壁)

6

(○北東より)

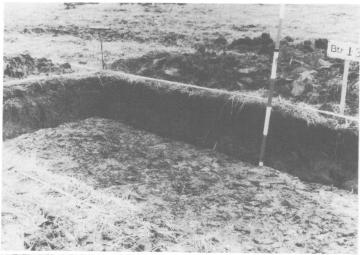


※(C地区基本層字を作成する。)

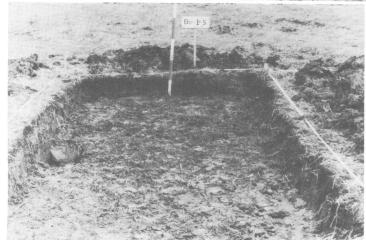
←褐色中〜粗 砂層が間層 としてある。 ⑦
☆Btr I・3
のようす
(東壁・北壁)

(○西南より)

(8)



※褐色中〜粗砂 層はない。

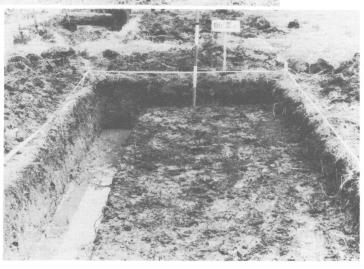


☆Btr I・5のようす

(○南より)

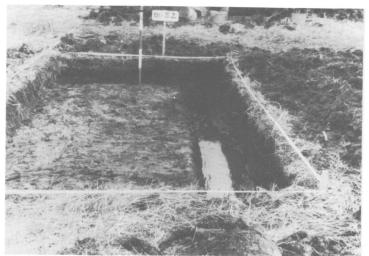
⑨ ☆Btr Ⅲ・1 のようす (西壁)

(○東南より)



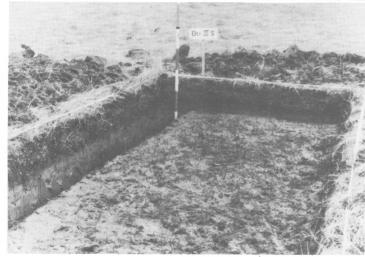
※約40cmの深さ で湧水する。

① ☆Btr Ⅲ・2のようす (東壁・北壁)



(○南西より)

(11)



(12)

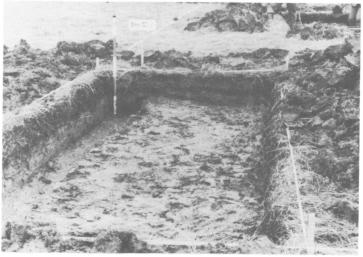
☆Btr Ⅲ・5のようす (西壁・北壁)

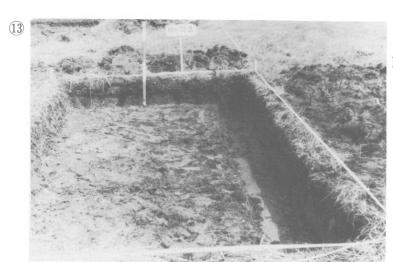
※BトレンチⅢ・5になると褐色中〜粗砂層がない。

(○東南より)

☆Btr V・1のようす (西壁・北壁)





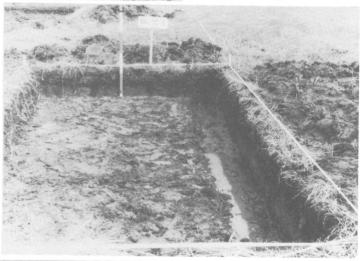


Btr V・2のようす (東壁・北壁)

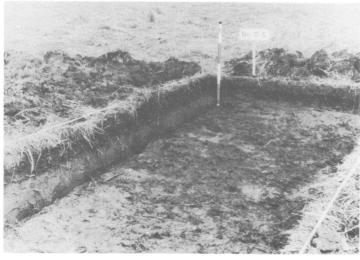
(○東南より)

☆Btr V・3のようす (東壁・北壁)

(○西南より)



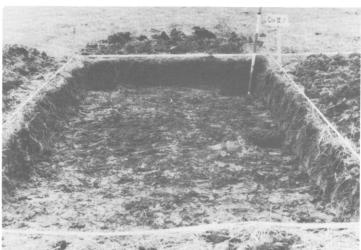
(15)



☆Btr V・5のようす (西壁)

(○東南より)

①6 ☆Ctr ①・1 のようす (北壁・南壁)



(○西南より)



☆Ctr II・3のようす (北壁・南壁)

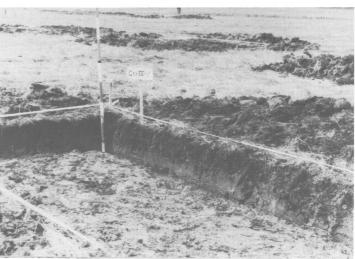
(○西南より)

☆Ctr [[・5のようす

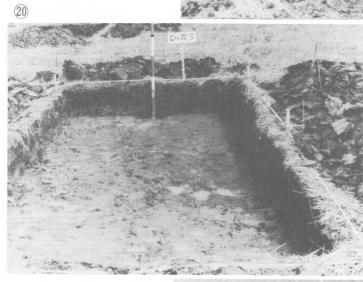


(○西南より)

①9 ☆Ctr N・1 のようす (北壁・南壁)



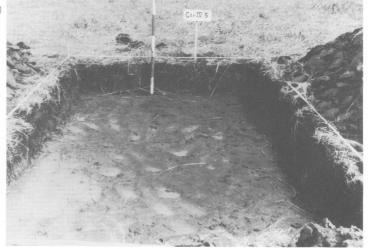
(○西南より)



☆Ctr IV ・3のようす (北壁・南壁)

(○南西より)

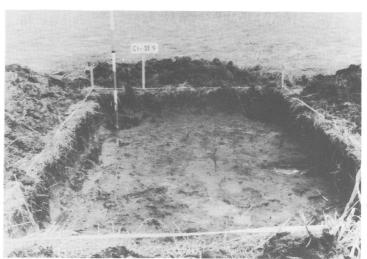
☆Ctr IV・5のようす (北壁・西壁)



(○南東より)

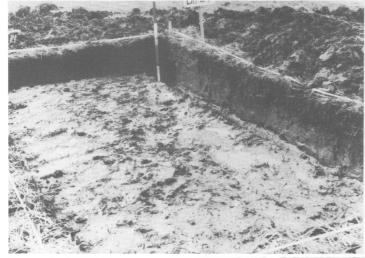
(22)

☆Ctr VI・5のようす (西壁・北壁)



(○西南より)

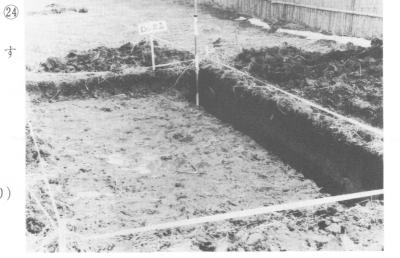




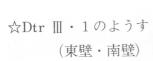
☆Dtr [[・1のようす (南壁・北壁)

(○西南より)

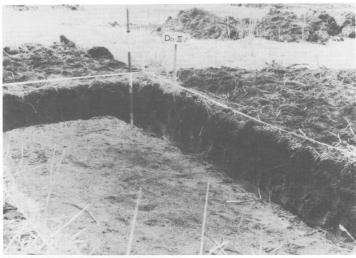
☆Dtr II・2のようす (南壁)



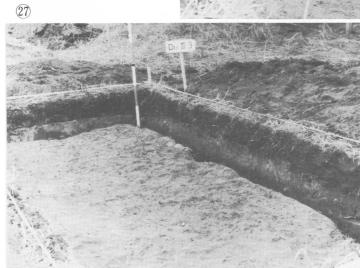
(○西南より)



(25)



(○西南より)



☆Dtr II · 3のようす (東壁・南壁)

(○西南より)

☆Dtr Ⅲ・5のようす (北壁・南壁)



(○西南より)

(28)

☆Etr W・1 のようす (北壁・東壁)



(○南西より)

29



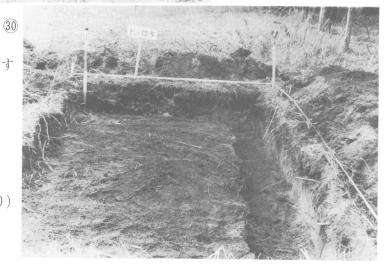
☆Etr W · 3のようす (東壁·南壁)

※Eトレンチ (防砂林に 近くなると、粘土層は ない。)

(○西南より)

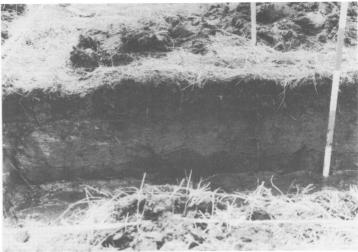
☆Etr W・5 のようす (東壁・南壁)





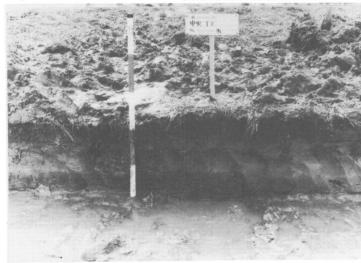
(31)

☆中央トレンチのうち南トレンチのようす。(西壁)



(○東より)

32



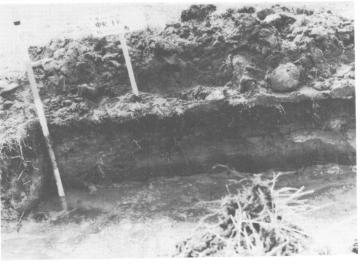
(33)

☆中央トレンチのうち南 トレンチのようす (西壁)

(○東より)

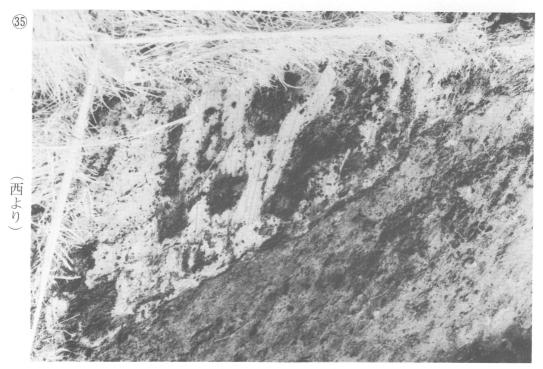
☆中央トレンチのうち北 トレンチのようす (西壁)





☆Ctr IV・3の橙色粘土層と砂丘砂の流れ

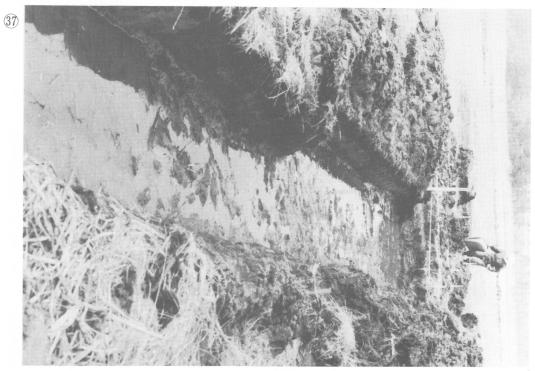




☆Ctr VI·5の橙色粘土層と砂丘砂の流れ

☆中央トレンチ南トレンチのようす (東南より)





☆中央トレンチ北トレンチのようす (東南より)

☆発掘区の松林の状況 (中央区)



(2)

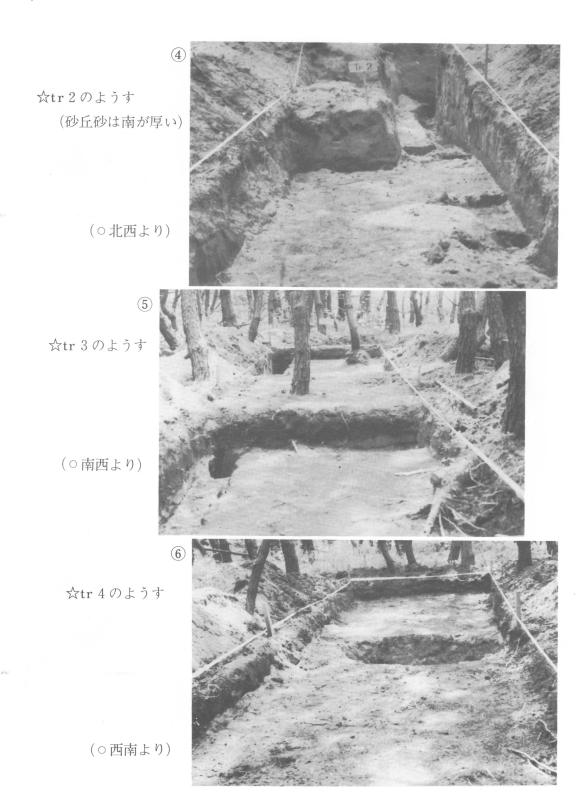


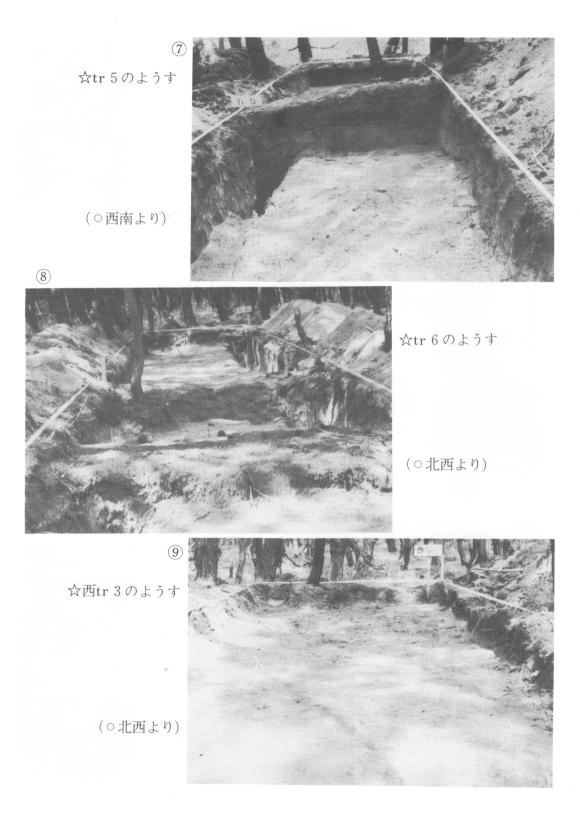
☆発掘区 (基準線付近) のようす

☆tr1のようす

(○南西より)







① ☆西tr 4 のようす



(○西南より)



☆西tr 5のようす

(○北西より)

☆西tr 6のようす



(○西南より)

(13)



☆tr 2 西壁南側の層序の ようす

☆tr 2の西壁北側の層序



☆同上のつづき(※ b - b はつづく)

☆西tr 5 近景



17)



☆DX₁-Eグリット のようす (Pit 8 が見える)

(○南西より)

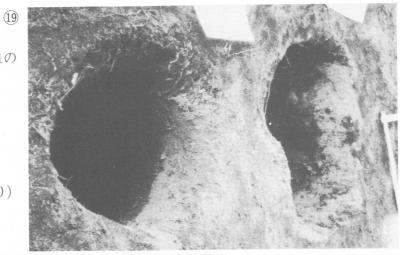
☆D11のようす
(Pit 8 · 9 が見える)



(○南西より)

☆D-11、Pit10・11の

ようす



(○南上方より)

20



☆DX₁1の発掘スナップ

(○南西より)

21)

☆西tr 6 発掘スナップ





②② ☆D X₁-G グリット発掘スナップ



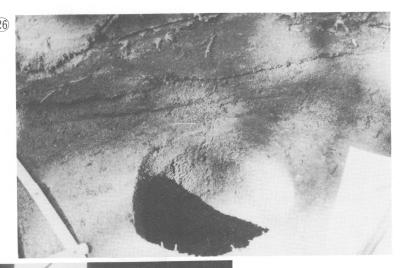


24 ☆D-11のスナップ

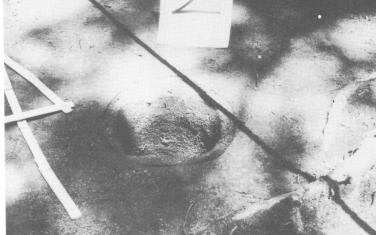




 $☆DX_1-B$ グリット のPit 5 のようす



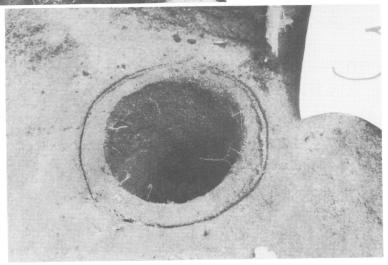
27)



(28)

 $\triangle DX_1 - C \not \cap U y \land$ OPit 6 O J f

 $\triangle DX_1 - E$ グリット のPit 8 のようす



DX $_1$ -B グリット のPit 7 のようす



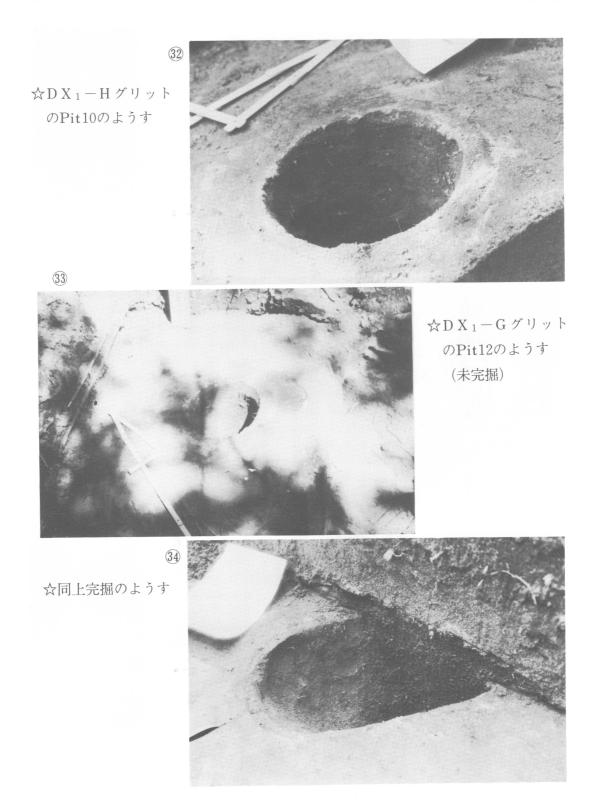
30



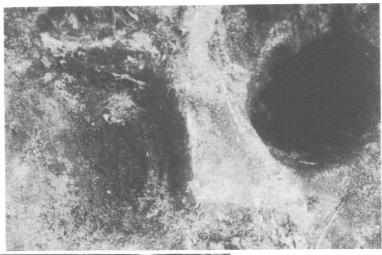
 $\triangle DX_1 - C$ グリット 東方のPit 9 のようす

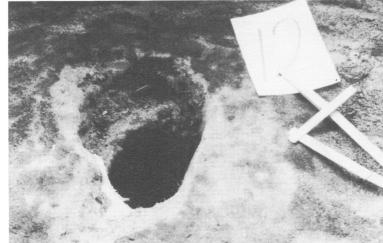
☆DX₁-Fグリット のPit11のようす





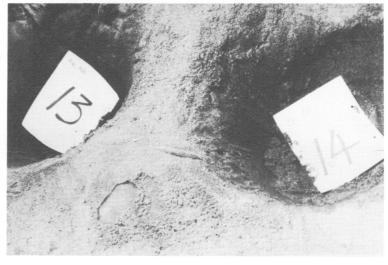
☆D-11区のPit 8 · 9 のようす





☆D-11区のPit12のよ うす

☆D-11区のPit13・14 のようす



〔Ⅰ〕発掘要項と調査参加者

[一] 春の調査(4月1日~6日)

1. 発掘主体者

青森県北津軽郡市浦村教育委員会

 代表
 教育長
 柏
 谷
 秀
 一

 主管
 社教係長
 成
 田
 義
 正

 派遣社教主事
 工
 藤
 明

☆ 期間 昭和60年 自4月1日至4月6日

2. 発掘担当者

日本考古学協会々員 新谷雄蔵

3. 調查員(地学担当)

日本地学教育学会々員

川村真一

調査員 (発掘担当)

北奥文化研究会々員 太田文雄

小 山 英 治

菊 池 由紀子

4. 補助調査員

青森職業訓練短大生 佐藤美香 五所川原工業高校生 太田竜哉

5.調査協力員 6人

〔二〕発掘面積・発掘法等

1.位置(第1図)

青森県北津軽郡市浦村大字十三字土佐1-80・81番地(中島)

- 2. 発掘面積 440m²
 - A 地区 昭和58年度調査 = (36 m²)
 - \bigcirc B地区 $(2 \times 4) \times 3 \times 5 = 120 \text{m}^2$
 - \bigcirc C地区 $(2 \times 4) \times 3 \times 11 = 264 \text{ m}^2$

$$(2 \times 18) + (2 \times 10)$$

= 56 m²

- ○D地区 昭和58年度調査 = (193.5m²)
- ○E地区 // =(10m²)
- 3. 発掘法 トレンチ法による。

〔Ⅱ-1〕発掘日誌抄

◎4月1日 (月) 天気 晴

発掘第一日である。午前8時30分、教育委員会前へ集合し、簡単な打合わせを行う。その後現地へ向う。テントを張り発掘準備をする。

本日は快晴なるも風強く寒い日である。

○中島全体を、 $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E$ 区の 5 区に分ける。(これは、昭和58年度の第一次発掘調査の際からの区分である。) → (第 2 図)

すなわち、中島の保安林の無い一周を(第2図に示すとおり区分した。そして中央部を占める保安林地帯は「中央区」として後日考えることにする。

• 今回の調査は、B地区・C地区を中心とし、特にC地区に発掘の主力を置いた。

[B地区]→第2図に示すとおり、(4m×20m)のトレンチを5本設定し、杭打ち後テープ張りを行う。草木は末だ生えないため作業は順調である。

西より順に(B_{-1} B_{-2} $\cdot B_{-3}$ $\cdot B_{-4}$ $\cdot B_{-5}$) トレンチと呼ぶことにする。

各トレンチに作業 員・調査員を配置し発掘にかかる。午前で第 I 層を掘り上げる。 第 I 層は、水分を含みやわらかくて作業は速い。

各トレンチとも午前で第Ⅰ層を終る。

午後より、Ⅱ・Ⅲ層へ掘りすすむ遺物の出土はない。

◎4月2日 (火) 天気 晴

午前8:30作業開始、今日の作業は、B地区の完掘とC地区のトレンチ設定である。

B地区の II層は橙色の美しい粘土である。おそらく水面下に堆積した粘土と考えられるもので水平に堆積している。

B地区は、B-1 ・B-2 ・B-3 ・B-4 ・B-5トレンチとも午前で第 Ⅲ 層まで掘り進む。

第Ⅲ層は、青色砂層で、少なくとも6~7000年以前の縄文海進期の堆積である。 発掘は第Ⅲ層で中止する。

その理由は、土師器または擦文土器、中世遺構は包含されない層であると判断した。

午后よりC 地区のテープ張りと杭打ちにかかる。この地区も雑草や木がなく作業は楽にすすむ。

[C地区]

 \bigcirc C地区は、北西より東へ、 $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E$ のトレンチを西南より北東へ $4m \times 20m$ として設定する。(第 4 図)

さらにトレンチ内に小トレンチ $1 \cdot 3 \cdot 5$ を設定し、この $1 \cdot 3 \cdot 5$ を掘ることにする。(呼び方は、例 \rightarrow A $\boxed{3}$ $\boxed{3}$ $\boxed{3}$ $\boxed{5}$ $\boxed{5}$

このように小区を掘ることに決定したのは遺物が出る地層とは認め難いからである。

作業は、Aトレンチ I・III区、Bトレンチ I・III・V区の順で行うことにする。本日午后はA I・A IIIの発掘を行う。この 1・3・5 小区では第 II層下位で湧水する。

◎4月3日 (水) 天気 晴

今日も浅春の風は寒い。本日の作業はBトレンチⅠ・Ⅲ・Ⅴ区である。

Bトレンチ I 区 − 1 · 3 · 5 小区より発掘する。この区では第 II 層の中間に「褐色中~粗砂層」 → II b 層が 2 ~ 7 cmの厚さで介在している。この層で第 II 層が上段 (II a) 下段 (II C) の両層に二分されるようである。(第6図P.L 5 − 6 参照) この II b 層は、Aトレンチ (以下 A tr と略記する。) I − 3、II − 1 · 3、Bt r Ctr − III、D tr − III においても観察される。

今日は予め設定してあるレベル原点の標高を測定する。すなわち、標高90 $_{\rm cm}$ ~78 $_{\rm cm}$ の低湿 $_{\rm loo}$ [$_{\rm loo}$ B $_{\rm loo}$ M $_{\rm loo}$ =0.787 $_{\rm loo}$] 一地である。午后 4 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 3 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 3 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 3 $_{\rm loo}$ 3 $_{\rm loo}$ 2 $_{\rm loo}$ 3 $_{\rm loo$

◎4月4日 (木) 天気 曇風強し

今日の作業は、Ctr Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ区の発掘である。芦ガヤを刈り発掘にかかる。Ⅵ 区は Ⅱ層で湧水する。層序は Ⅳ区で、第 Ⅱ層と砂丘砂が Ⅱ層上で互層をなしている。 多分砂丘の裾であろう。A・B・Ctr とも湧水し潮位によってその高さが異なる。

◎4月5日 (金) 天気 晴

今日も浜風が寒い。本日の作業は、D・Etr Ⅱ・Ⅳ・W区の発掘である。

今日は発掘と併行してA・B・Ctr のセクション図を作成する。

また、中央トレンチを設定し、トレンチャーにより掘り込みを行う。掘り込み終 了後セクションを整理する。

 $A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E \setminus V$ 大とも、遺物の出土は皆無である。

セクションを観察すると、Ctr W区1小区および同3小区において、砂丘砂と第 Ⅲ層(Ⅲa)との互層を若干認める。

また、Etr W区は、第1層(表土)が厚い、この層はD地区(昭和58年度調査)の表土に近似し灰白色中砂〜細砂の混入が認められる。

◎4月6日 (土) 天気 晴

発掘最終日である。B地区各tr、およびC地区各tr のセクションポジションを整理、排水を行い写真撮影をする。

また、分担してセクション図を作成する。

午后は、テープ、杭をとり発掘面を清掃し作業を終了する。十三湖を渡る風は今日も強い。

(新谷記)

〔Ⅱ〕発掘日誌抄

[一] 夏の調査(8月5日~16日)

1. 発掘主体者 既述の春の調査に同じ。

主管・担当係

☆期間 昭和60年8月5日~8月16日

- 2. 発掘担当者 日本考古学協会々員 新谷雄蔵
- 3. 調査員

(地学担当) ○日本地学教育学会々員 川村真一

(発掘担当)○北奥文化研究会々員 太田文雄

〃 ○〃 〃 小 山 英 治

〃 ○〃 桜 井 有 一

〃 ○青森県文化財パトロール指導員 小山内 哲 治

〃 ○北奥文化研究会々員 山川夏子

4.補助調査員

○青森職員訓練短大生 佐藤美香

○県立五所川原工業高校生 太田竜哉

〇五所川原第四中学校 蒔 田

5. 調查協力員

〇山内 いつ・角谷ちよめ・秋田谷 節

○工藤 操・佐々木まさ子・田中トキ

○三和チセ子

〔二〕発掘面積・発掘法等

1. 発掘面積(中央区)→(第2図参照)

 $\bigcirc \text{tr } 1 \qquad \sim 6 = (2 \times 10) \times 6 = 120 \,\text{m}^2$

〇西 $tr1 \sim 6 = (2 \times 10) \times 6 = 120 \text{ m}^2$

 $\bigcirc D \times 1 \boxtimes = A \cdot B \cdot C \cdot D \cdot E \cdot F \cdot G \cdot H = 142.08 \text{ m}^2$

 $OD - 11 \boxtimes = (A \cdot B \cdot C) = \$ 50 m^2$

☆合計約 =432.08m²

(このうち、 $DX1 \cdot D-11$ は第一次調査の分の再発掘を含む。)

2. 発掘法 トレンチ法・グリット法による。

[Ⅱ-2] 発掘誌抄

◎8月5日 (月) 晴後曇

AM8:30 市浦村教育委員会へ集合、簡単な打合わせの後現地へ向う。

本日の作業は次のとおりである。中島遺跡の中央区に東西・南北に基準線を設定する。

南北基準線の東側に第1~第6トレンチを設定、第6トレンチより発掘にとりかかる。

本日の発掘は、第6~4トレンチを設定し掘り下げを行う。(以下、tr 6~4と略記する。)

tr 4、1区(2×10のトレンチの南半5 m を1区とする。において径1 m の円形プランの白砂落込みを I 層下で検出するも、掘り下げは後日とする。

第1日の作業は、tr 6~4で終了するも遺物は無い。

◎8月6日 (火) 曇後雷雨

AM8:30 現地集合、本日の作業は次のとおりである。

tr 3・2の掘り下げ完了するも遺物の出土はない。tr 1・2のトレンチを設定するも次第に雨が強くなり雷雨となる。残念ながら午前で作業を終了する。

◎8月10日 (土) 晴後曇小雨あり

AM8:30 作業開始、本日の作業、tr 1の掘り下げ完了、tr 4-1区で検出した白砂のあるピットを掘り下げるも松を抜いた穴と見られる。

DX1区の第一次調査で検出したグリットを掘り上げる。(pit 5・6・7) → グリットをA・B・C・D-(第3図参照)

新しくグリット $E \cdot F \cdot G \cdot H$ を設定して掘り下げを行う。この $E \sim H$ グリットの設定は、pit 5 · 6 の間隔を計り推定で設定した。

その結果、F グリット IV層上面(灰白色中粒砂層) →第 5 図参照 – でpit 11を 検出、また G グリット II 層上面でpit 12を検出する。

鰺ケ沢町中央公民館長、東北学院大学生見学に来る。

◎ 8月11日 (日) 晴

AM 8:30 作業開始、本日の作業はつぎのとおりである。

tr 1、西tr 1・3 掘り下げ完了、午后より西tr 4 の掘り下げを行う。

また、 Dx_1 東側に 6×4 mのグリット、およびその東側に 2×4 mのグリットを設定し、それぞれグリット $E \cdot H$ とする。午后さらに $E \cdot H$ グリットを拡張する。この拡張区よりpit . 10を検出したためである。

 D_{-11} では、第一次調査で検出したpit $8 \cdot 9$ 、 $10 \cdot 11$ を掘り上げ、それを拡張する。さらに松をさけて拡張する。(B)pit 12を検出、また南側拡張区(C)よりpit $13 \cdot 14$ を検出する。また北側拡張区では、小方形落込みも検出する。(第10図参照)

◎ 8月12日 (月) 晴

AM8:30 作業開始、本日の作業は次のとおりである。

• D_{-11} 区北拡張区(B)、南拡張区(C) をさらに拡張する。新柱穴状ピットの検出はない。

また、西tr 6のトレンチを検討するも東西に伸びる砂丘は自然のものであると判断する。

 D_{-11} 区でpit 7こ、 D_{X1} 区でpit 8こを検出する。遺物の出土はない。

◎8月15日 (木) 晴

本日の作業は、セクション図の作製と実測図の作製、およびレベルの測定である。 午前で発掘区の清掃を行ない午後より、 D_{-11} 区、 D_{x-1} 区、および各トレンチの層 序を再検討する。

遺物の出土はないが、検出した柱穴状ピットは、第 \blacksquare 層上面のもの、 D_{-11} 区pit $8\cdot 9\cdot 10\cdot 11\cdot 12\cdot 13\cdot 14$ 、すなわち全部のpit が第 \blacksquare 層より掘り込んでいる。 D_{x-1} 区では、pit $7\cdot 9\cdot 10\cdot 12$ が第 \blacksquare 層より掘り込んでおり、他のpit $5\cdot 6\cdot 8\cdot 11$ は第 \blacksquare 冒より掘り込んでいるものである。

このことから第Ⅱ層(黒土層)に一生活面があり、また、第Ⅳ層(灰白色中粒砂層→灰状物質層)に、いま一つの生活面があることが認められる。

◎8月16日 (金)* 晴

AM8:30 発掘最終日である。前日につづき実測図、セクション図の作製をすすめる。

また、写真をとり、発掘区を清掃し、作業を終るも、市浦村で開催される北奥古 代文化研究会の見学に備え、ピットを保護し埋めもどしは後日とする。 今回の発掘では遺物はない。しかし15この柱穴状ピットの対応関係の問題、ピットの性格の問題等残された問題が多い。

しかし、遺構は、 D_{-11} 、 D_{X1} 区 に集中している。これらを含む中島西南部一帯は構築物の遺構群が二つの生活面に所在することは確実であろう。

[Ⅲ〕地形と地学的環境

1. 位置・地形(第1図)

「中島遺跡」は、津軽十三湖の北西部に位置する小島「中島」に存在する。

十三湖は、津軽平野の北端にあり、湖の北西部で浜提状砂丘間に僅かに通じた水道により日本海と連絡している。湖の面積は干拓の結果、現在は約17.7kmである。流入河川の主なものは岩木川で他に山田川、薄市川、今泉川、相内川などがある。

湖の深度は最深部で3m、平均水深約1.5mと浅い。 外海と通じているので汽水性を示す。

中島は周囲約2.3km、面積約10万平方米で北北東方向に長軸をもつ長楕円形をした小島である。島の西側一帯は標高1m以下の低湿地を形成しているのに対し、東半部は平均標高1.8mとやや高く、低いながらも砂丘を形成し、松の植林地となっている。最高所は島の南端部で標高2.40mである。東半部の湖岸は1.5m~2mの急崖となっている。

東側湖岸の南端と北端では、沿岸流の堆積作用により砂嘴がそれぞれ南方および 北方に成長している。

2. 地質および層序(第5・6・7図)

a. D地区基本層序(第5図、第5図-X)

島の西半部は、泥質砂よりなる低湿地 となっているのに対し、東半部は北西の卓越風による砂の堆積のため、高さ1.8~2.0mの砂丘を形成している。黒層を被覆する砂は、東岸北部一帯は40cm~80cmであるが、東岸南部ほど厚く、2mをこえる。最高所が島の南東端にあるのは、北西風による砂の堆積の結果と考えられる。

東岸の D_{-1} トレンチで得た基本層序は、第5図のとおりである。各層の特徴の概要を次に述べる。なお、 D_{X_1} 地区の層序も同様であるので同地区の特徴についてもふれておく。

☆D地区、十三湖中島、東南岸地域基本層序(第5図)

I層(表土)

灰白色の中砂~細砂で厚さは40cmであるが、南部程厚くなる。

• Ⅱ層 (黒色土)

黒褐色の砂土で腐植は殆んど含まない。淘汰のよい細砂が主体である。

• Ⅲ層 (褐色粗砂層)

粗砂約80%を占め、中に $2 \sim 3$ mmの細礫を含む。遺物包含層である。また D_{X1} 地区では下部に10cmの細礫層を含む。

• IV層 (灰白色中砂層)

本層を一応中砂層としたが、粗砂分もかなり多い。 Ⅲ層とは色調のほか、細礫を含まないことで区分した。

本層の最下層には厚さ $1\sim 2$ cmの灰状物質と思われるものが混入した層がある。 D_{X1} 地区では、本層が12 cmとやや厚い。また、本層の直上には厚さ 7 cmの暗褐色粗砂層がある。

• V層(含礫褐色粗砂層)

主体は褐色の粗砂で約80%を占める。本層上部には厚さ18~27cmの細礫層を3層狭在している。この層以外にも、2 mm~5 mmの中礫が点在している。

VI層(褐色礫層)

地下水面ないしそれ以深に存在するため赤褐色を呈する。根毛まじりの赤褐色 細礫層で中に $3 \sim 4 \text{ mm}$ の中礫、まれに $4 \sim 7 \text{ cm}$ の礫を含む。

b. C地区基本層序(第6図)

中島の東半部は北西の卓越風による砂の堆積のため、高さ1.8m~2.0mの砂丘を形成しているのに対して、西半部は、泥・砂からなる低湿地帯となっている。 春の調査地域は西半部の低湿地部分である。

A・B・C地域の各トレンチから得られた資料から作成された基本層序は、第6図のとおりである。各層の特徴の概要をつぎ述べる。

☆C地区、十三湖中島、西北岸地域基本層序(第6网)

• [層(表土)

泥質の黒色土で草根が多い。厚さは10~13cmとほぼ一定している。

• Ⅱ層 (粘土層)

下部は青色粘土層、上部は橙色粘土層である。上部と下部粘土層の間には場所

によって2~7cmの砂層を狭む。

上部粘土層をⅡa層、挾在する砂層をⅡb層、下部粘土層をⅡC層とした。

○ II a 層(橙色粘土層)→腿褐色粘土を主体とし、その中に橙色粘土が混在する。 粘土の中には、まれに0.5mm位の石英粒がみられる。

草木根などの植物の遺体が多く、環流のない停滞水の状態にあったものと考えられる。

○ **II** b 層(中~粗砂層)A — **I** ・ **III、** B — **I** ・ C — **III** ・ D — **III** 地区に局部的に分布する。

本層は褐色を呈し、石英、かんらん石粒といった鉱山岩、頁岩のような岩石 粒も多い。砂粒間には泥質物が充てんされている。

調査地域のほぼ東西方向に通した中央トレンチ断面では、本層は東から西へ向って尖滅しているのが観察される。

本層と砂丘砂とを肉眼的に比較観察してみると、本層に泥質物が存在していることを除けば、両者は構成粒子の大きさ、種類等類似している。

このことから、本層はIIC層堆積の終りごろ、砂丘砂が何らかの原因で押し流され、局部的に堆積してできたものと思われる。

• Ⅲ 層(青色中砂層)

この地域の基盤をなす層で、0.5mm程度の粒径のものが多いが、1~2 mmの粗砂 ~細礫も目立つ。石英粒のほか、玄武岩、安山岩の岩石粒も多く全体的に暗青色 を示す。砂粒の円磨度は大きい。

区中央区、十三湖中島、中央部地域基本層序図(第7図)

十三湖中島は、A地区、B・C地区、D地区、E地区によって、その層序には、 若干の差違を認めることが可能である。

そのことは、D地区、C地区の基本層序図、および、中央区基本層序図を検討されれば理解されることと思う。その意図でつぎに中央区における基本層序図を掲げ、各セクション図の理解に役立てたいと思う。

第7図-1に示したとおり、中央区における基本層序はつぎのとおりである。

- I 層 砂丘で中砂が20~110cmの堆積ある。
- II 層 黒土層→20~50cmの堆積あり、均質でしまりがある。
- III層 黒褐色細砂層→漸移層、10~20cmの堆積あり、 II~ IV層の漸移層である。
- IV層 粗砂層→48~90cm、まれに 2 mm程度の礫を含む、やや湿性がある。
- V層 灰白色中礫まじり粗砂層→80cm+、細~中礫で7~8 mmの礫を含む。

以上の層序が基本層序である。特に I 層とした砂丘砂の堆積は、南西岸において厚い堆積を示している。

[Ⅳ] 出土遺構 (第9·10図、P.L23-19、P.L25~28)

•春の発掘調査においては、B地区、C地区を対象に実施したのであるが、出土遺物や遺構は検出されなかった。

このB・C地区は、[Ⅲ] — b で述べたとおり、低湿地部分で、基本層序で述べたとおり、泥質黒土、青色粘土または橙色粘土とつづき、人間が生活を営む環境としては不適であったと考えられる。したがって遺物、遺構の出土はないのも納得できるところである。

• 夏の調査においては、 ${\rm tr}\ 1\sim 6$ 、西 ${\rm tr}\ 1\sim 6$ の各トレンチにおいては、出土遺物や遺構は、やはり検出されず、砂丘は、東南岸に厚く、北西部は標高も低くうすいものであった。

【Ⅱ〕-1·-2で述べたとおり、D_{X1}·D₋₁₁区におい柱穴と考えられるピット群を検出した。

以下、このピット群について述べることにする。

(a) D_{X1}検出のピット群 (第 2 · 3 図、P.L25~27)

Dx₁で検出したピット群は、全部で8こ検出した。(第3図)

このうち、pit $5 \cdot 6 \cdot 7$ の 3 こは、昭和58年度(第一次発掘調査) 調査で検出したものである。

今回の調査においては、pit 8 · 9 · 10 · 11 · 12の5こである。

これらのpit 5~12の柱穴状pitを確認面ごとに整理すると、つぎのとおりである。

(第 N層で確認)→pit 5 · 6 · 8 · 11の 4 こを検出

このように(第5図)に示した基本層序、第Ⅱ層(黒土層)と第**Ⅳ**層下端の灰状物質層の二面に柱穴状ピットが検出される。

このことから、第一次調査で指摘したとおり、生活面が二面あったものと推察 される。

(b) D₋₁₁検出のピット群(第10図、P.L23-19、P.L28-35~37)
D₋₁₁で検出したピットは、pit 8・9・10・11・12・13・14の7こである。
このうち、pit 8・9・10・11の4こは、昭和58年度(第一次発掘調査)の調査で

検出したものである。

この D_{-11} 区で検出したRt 8 \sim 14は、いずれも第 \blacksquare 層(黒土層 → 第 5 図)で検出したものである。

(C) D₋₁₁区検出の落込み遺構(第10図)

この遺構は、南側辺60cm、北側辺70cm、長辺1.2m、深さ約8cmと浅い長方形の落込みである。

この落込みの北、東側には少量の炭化材の細片が認められたが、黒土は焼けた痕跡は無い。

この(b)、(C)で述べた遺構は、いずれも第 \mathbb{I} 層(黒土層)で検出したものであって、 D_{X1} 区のpit 群とあわせて考えたとき、第 \mathbb{I} 層、第 \mathbb{I} 層(灰状物質層)の二面に生活面が所在したことは明らかである。

これらの遺構については、さらに考察の項で再度述べたい。

[V] 考察 (第2図)

(a) 春の調査について (4月1日~6日)

既に述べたとおり、春の発掘調査は、(第2図) に示す $\mathbf{B} \cdot \mathbf{C}$ 地区を対象として実施したのであるが、この地区は、 $\mathbf{B} \cdot \mathbf{M}_1 = 0.906 \, \mathrm{m} \, \mathrm{v}$ $\mathbf{B} \cdot \mathbf{M}_2 = 0.782 \, \mathrm{m}$ が示すとおり低湿地である。

このことは、基本層序(第6図)が示すとおり、第Ⅱ層(Ⅱa層)は、橙色 粘土で水面下に堆積されたものであり、また同Ⅱ b 層は、部分的に存在するが 泥質物を充てんしており環流のない水面下の堆積を示しているものと判断され る。

すなわち、ⅡC層堆積の終末期に砂丘砂が何らかの原因で押し流されたのが Ⅱb層であろうと考えられる。

したがって(第 II 層)は、基本的には水面下の堆積層と考えられる。また、 第 III 層は、この地域の基盤をなす層である。

すなわち、このB・C地区は過去においても生活面ではあり得ないと考えられる。

(b) 夏の調査 (第2・3・5・9・10図) - (8月5日~16日)

夏の調査は、中央区を対象に発掘調査を実施したことは既述した。

この調査において、 $\operatorname{tr}\ 1\sim 6$ 、 $\operatorname{mtr}\ 1\sim 6$ においては遺物・遺構の出土はない。

 \mathbf{D}_{X1} および \mathbf{D}_{-11} 区において既述のような柱穴状ピット群を検出した。以下このピット群について考察を加えてみる。

◎D_{X1}、D₋₁₁区検出のピット群について、

この第 Ⅱ 層上面における生活面、および第 Ⅳ 層(灰状物質層)上面における生活面は、年代的にどのように理解し、かつ把握すべきであろうか、つぎに考えてみたい。

◎本遺跡は、昭和28年度に早稲田大学の桜井清彦氏が豊島勝蔵氏とともに調査され、 考古学雑誌40巻1号に発表紹介された遺跡である。

それによれば、第12図に掲示した模式図の(ア〜キ)は、漆黒土層中より出土 したと言われている。これらの土師器は、桜井氏によって提唱された「東北北部 の土師器型式」第一型式とされるものである。

②また、本遺跡の第一次発掘調査において D_{-10} 区(第2図参照)の第II層(黒土層)より出土した第2図1・②の土器は、筆者は擦文土器としたのであるが、異論が多いようである。

(ア〜キ) とした土師器は「東北北部の土師器型式第一型式のものであり、その年代は、

桜井清彦氏は、7世紀後半 ~ 8 世紀前半とされ、杉原荘介氏は、晩期Iとして八世紀、ほぼ奈良時代とされているところである。

桜井氏の報告書(考古学雑誌40巻1号)によると、調査された時点では破片の みの出土ときくが漆黒土層より(ア~キ)が出土したと言う。

この漆黒土層が、第一次、第二次調査で筆者等が「基本層序図」に示した第 Ⅱ 層に相当する可能性が強い。

また、第12図①・②に示した2個体の土器は、筆者は擦文土器としたが、土師器とすべきである。の意見も多く、(ア~キ)とは極めて器形・手法において類似しているものである。(筆者が擦文土器としたのは、北方文化圏の考えに基づく。)したがって年代的にも両者は同年代と考えてよいのであろう。また、①・②に

「擦文土器編年表」→日本考古学辞典によると前期に位置づけられている。そして擦文土器の成立が8世紀代後半ないし末と考えているとの意見もある。

類似するもので、青森県「沢田B」出土の擦文土器は、

以上のことから、第12図に示した($r\sim$ + λ)(①・②)は、その年代を8世紀後半に推定することができよう。

◎ここで注目すべきは、これらの土器が出土した第 II 層には、既述のとおり、D x 1

区、およびD-11区において柱穴群が検出されたことである。

第 Ⅱ層から出士した土器を8世紀代とすれば、検出されたこれらの柱穴群は、 やはり8世紀代のものと考えるのが自然であろう。

◎また、既述したとおり、D_{X1}区においては、

第Ⅳ層下位の灰状物質層において、やはり柱穴群が検出されている。これらの 柱穴群は、明らかに第 Ⅱ層検出のものよりは古いことは確実である。

この第IV層下位からは、土器等の遺物の出土が無いので、年代的考察は不能である。また他の発掘区には存在しない「灰状物質層」はどのような性格のものかも目下のところ不明である。

それが解明できれば第Ⅱ層下位の生活面も明らかになるものと考える。

また、第 Ⅱ層の柱穴群、第 Ⅳ層下位の柱穴群とも柱列の対応関係も今回の調査では未だ不明の点が多く今後に残された問題である。

いずれにしろ、 D_{-10} 、 D_{-11} 、 $D_{X\,1}$ 区を含む一帯には、さらに遺物、遺構が所在する可能性が高い。それ故第 2 図に示すとおり、実線・点線で囲んだ地域は今後とも要注意の地区と考えられるところである。

さらに付言すれば、(第 2 図参照) $A \cdot B \cdot C$ 地区、および中央区、D地区を含めて、 $D_{-10} D_{-11}$ 、 D_{-1} 、 $X_{-2} D_{X1}$ 区では、第一次、第二次調査において、遺物や遺構の検出された地区である。

他のトレンチやグリットでは、一切検出はない。地質の観察から見ても、中島の北西部、北東部は低湿地であって、遺跡は、南岸の高地に集中するもののようである。おそらく安東一旅の遺跡は、この南岸に集中するものと考えることができよう。 (新 谷 記)

☆参考文献

- 1. 市浦村「十三・中島遺跡」 昭和58年 市浦村教育委員会
- 「青森県十三村中島発見の土師器」桜井 清彦
 昭和29年 考古学雑誌40巻1号
- 3. 「北奥の古代文化」 平山 久夫編 昭和50年 学生社版
- 4. 「土師式土器集成 4」杉原 荘介・大塚 初重 昭和49年 東京堂出版
- 5. 「日本考古学辞典」江坂・芹沢・坂詰

昭和58年 ニューサイエンス社

十三・中島遺跡(第二次)

- 発行年月日 昭和61年3月20日
- 発 行 者 青森県北津軽郡市浦村教育委員会
- 著 者

日本考古学協会々員 新谷雄 蔵日本地学教育研究会々員 川村 真一

•印刷所예西北印刷

일시다. 1980년 1일 전 1일 전 1984년 1980년 - 1984년 1일 전			
	다음 : 100 전 100 사용하다 하나		
			•
리스(1941년) 전 기계를 들어났다. - 1148년 - 1248년			
		•	
불발경사 경기가입니다. 금발 시간 역사 교육사 (1988년)			
일본 경기를 보고 하는데 있다.			
unus un serie de la 1861. Canada de la 1861 de l			